様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：83903
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23730690
研究課題名（和文）中高年者のワーク・ファミリー・シナジーに関する心理プロセスの解明

研究課題名（英文）Elucidation of the psychological processes involved in work-family synergy of middle-aged and elderly people

研究代表者
富田　真紀子（TOMIDA MAKIKO）
国立長寿医療研究センター・予防開発部・研究員
研究者番号：40587565

研究成果の概要（和文）：中高年者の仕事と家庭の両立の様相を明らかにするため、ネガティブ側面であるワーク・ファミリー・コンフリクト（以下、WFC）、ポジティブ側面であるワーク・ファミリー・ファシリテーション（以下、WFF）の視点から検討した。
中高年者の WFC/WFF 尺度の因子構成を検証した上で、中高年者の世代、性による WFC/WFF の特徴を明らかにした。また、仕事および家庭環境要因、WFC/WFF、精神的健康、という心理プロセスモデルを構成した。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify the aspects of work-family balance of middle-aged and elderly people, considered from the perspective work-family facilitation (WFF) is a positive side and work-family conflict (WFC) is a negative side.
The factor structure of the WFC/WFF measure of middle-aged and elderly people was confirmed. Then, differences by gender and generation have been shown about the characteristics of the WFC/WFF of middle-aged and elderly people. In addition, psychological process model of work and family environmental factors and WFC/WFF and mental health was constructed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：仕事と家庭の両立　中高年者　精神的健康
ワーク・ファミリー・コンフリクト　ワーク・ファミリー・ファシリテーション

１．研究開始当初の背景

近年、高齢化が急速に進展し高齢者が経済社会で活躍するようになった。また、我が国では 2015 年には 4 人に 1 人が高齢者となることが予測され、中高年者の経験・知識を生かしての社会参加が求められている。しかし、中高年者世代が抱える家庭役割負担の「介護」、「子・孫の養育」、「家事」は就業継続を阻害し、両立生活が困難な状況にある。そのため、中高年者男女を対象とした両立生活に関する総合的・包括的研究が求められる。

２．研究の目的

家庭生活と調和をはかりながら意欲と能力を生かして働くことは、高齢者にとっての自己実現・自己成長になると考えられるため、ネガティブ側面だけではなく、ポジティブ側面も含めての検討が必要である。そこで、本研究では、両立に関するネガティブ側面のワーク・ファミリー・コンフリクト（以下、WFC）、ポジティブ側面のワーク・ファミリー・ファシリテーション（以下、WFF）の視点から検討する。これら 2 つの側面から、中高年者の

ワーク・ファミリー・シナジー（仕事と家庭の相互作用）の実態を捉える。はじめに、性差・年代差を確認し、中高年者のワーク・ファミリー・シナジーを規定する仕事と家庭環境要因を抽出する。そして、精神的健康との関連を明らかにする。中高年者男女ともに、就業を継続することが社会的要請として高まり、就業を継続したいとする者が多くなっていることから、バランスよく両立生活を過ごすことが中高年者のメンタルヘルス維持・増進に与える心理プロセスを解明する。

３．研究の方法

(1)調査対象者

本研究は、「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究（NILS-LSA)」の長期縦断調査データを用いて行う。

NILS-LSA は、国立長寿医療研究センターで行われている老化に対する大規模なコホート研究である。1999 年から現在まで、40 歳代から 80 歳代の性および年代ごとに層化無作為抽出された住民 2400 名を対象に、専門の調査研究施設において約 2 年おきに縦断調査を実施している。調査内容には心理学的側面に加え、医学・遺伝子・形態・身体組成・運動・栄養といったデータが収集され、非常に詳細な情報も得ることができる。心理調査は、自記式調査票、面接調査によって収集・蓄積されている。本研究実施時は第 7 次調査（2010.7 - 2012.7）でデータ収集を実施した。

(2)調査項目およびデータ収集

自記式調査票：調査項目として以下のものを収集した。①個人背景要因：年齢、性別、婚姻状況（既婚/その他)、教育年数、雇用形態（正規雇用/その他)、収入、経済状態満足度、労働時間を尋ねた。②家庭関与：内閣府(2006)を参考に、「家事関与」「育児関与」「介護関与」として、それぞれの役割を担当する程度を尋ねた。③仕事関与：仕事コミットメント（伊藤他、 2006）の「仕事満足感」と「仕事へののめり込み」の 2 下位尺度。④WFC/WFF 尺度（富田他、 2012)：杉野（2006）と金井（2002）を参考に作成。仕事と家庭生活を両立する際に生じる、役割間の「葛藤」と「促進」を測定する尺度であり、「仕事→家庭葛藤」(5 項目)、「家庭→仕事葛藤」(5 項目)、「仕事→家庭促進」(3 項目)、「家庭→仕事促進」(3 項目）の 4 下位尺度。⑤精神的健康：「生活満足度」(古谷野、 1996）と「抑うつ」（Radloff、 1977; 島他、 1985）を使用。⑥心理的 well-being(西田、2000):Ryff(1989)の理論的背景をもとに構成された心理的発達を測定する尺度。「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「自己受容」「環境制御力」「積極的な他者関係」の 6 下位尺度。

４．研究成果

(1)WFC/WFF 尺度作成および年代・性別による検討

中高年者の仕事と家庭の両立意識を明らかにするため、ネガティブ・ポジティブ両側面を含む WFC/WFF 尺度の検討を行い、かつ、これらの性・年代による様相の違いを明らかにした。杉野（2006）と金井（2002）を参考に作成した仕事と家庭生活を両立する際に生じる、役割間の「葛藤」と「促進」を測定する尺度を用い、4 因子構造（5 件法）を仮定した。なお、高得点ほど、仕事と家庭生活において表記の方向で生じる葛藤あるいは促進を強く認識していることを示す。解析は SAS.9.1.3 によるが、一部 AMOS16.0 による分析を実施した。

分析対象は、NILS-LSA の第 7 次調査(2010.7－2012.7）に参加した 2,330 名のうち有職者である 1,351 名(男=788 名,女=563 名)(40-85 歳,平均 54.82±9.86 歳)。WFC/WFF の 16 項目が事前の想定通りの 4 因子構造となることを確かめるために、AMOS を用いた確認的因子分析を行った。4 つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散があることを仮定したモデルで分析を行ったところ、各項目への標準化推定値は.50 以上で有意であることが確認され、因子間の共分散は「家庭→仕事葛藤」、「家庭→仕事促進」の因子間の相関を除き有意であった。適合度指標は GFI=.924 、 RMSEA=.073 、AIC=880.132 であった。そこで、この相関が低く有意ではなかった因子間相関を 0 としたモデルで再度分析を行ったところ、適合度指標は GFI=.924、RMSEA=.073、AIC=878.242 と最初のモデルよりもデータに適合した結果が得られた。次に、男女別に上記のモデルを分析した。適合度指標は、男性 GFI=.904、RMSEA=.082、AIC=693.903、女性 GFI=.925、RMSEA=.067、AIC=421.571 であり、いずれも満足すべき値が確認された。

最後に多母集団同時分析を実施し、配置普遍性を検討した。適合度指標は GFI=.913、RMSEA=.054、 AIC=1115.446 であり、男女ともに共通して適合度がよく、配置普遍が成り立つ可能性が高いことが示された。各尺度のα係数は、「仕事→家庭葛藤」 α=.83、「家庭→仕事葛藤」 α=.85、「仕事→家庭促進」 α=.69、「家庭→仕事促進」 α=.71、といずれも概ね満足すべき値であった。

性・年代別検討を実施したところ、WFC/WFF 尺度の 4 下位尺度の項目平均値を算出し、性差（男、女）と年代差（40 代、50 代、60 代、70 代以上）を明らかにするため、2 要因の分散分析を実施した。「仕事→家庭葛藤」(図 1)は、交互作用は認められず、性と年代の主効果が有意であり（F=4.16, p<.01, F=13.88, p <.001)、男>女、40 代>60 代であった。「家

庭→仕事葛藤」（図 2）は、交互作用は認められず、性の主効果が有意であり（F =18.33, p<.001）、男<女であった。「仕事→家庭促進」（図 3）は、交互作用は認められず、年代の主効果が有意であり（F =3.10, p <.05）、40 代<60 代であった。「家庭→仕事促進」（図 4）では、交互作用および主効果のいずれも有意な差は認められなかった。

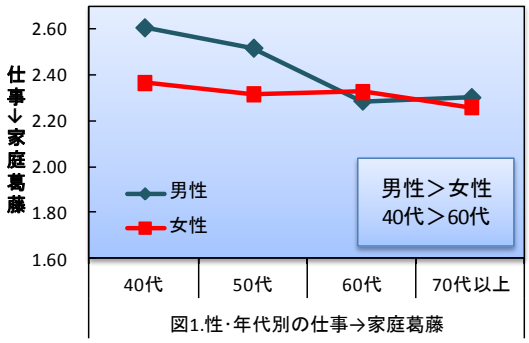

図1.性･年代別の仕事→家庭葛藤

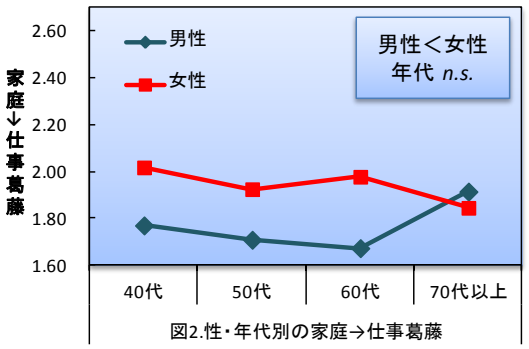

図2.性･年代別の家庭→仕事葛藤

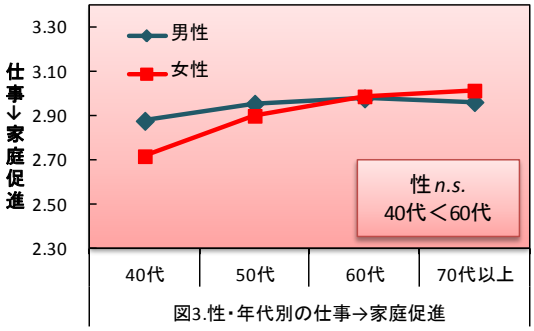

図3.性･年代別の仕事→家庭促進

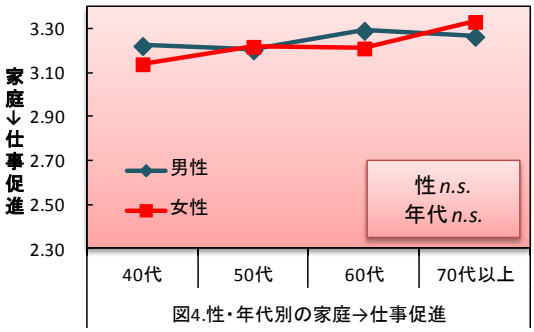

図4.性･年代別の家庭→仕事促進

(2) 中高年者の仕事と家庭関与・WFC/WFF・精神的健康の関係

どのような仕事と家庭関与をしていると、ワーク・ファミリー・バランスが実現し、精神的健康の維持・増進につながるかを明らかにする必要がある。研究成果(1)で構成した中高年者の WFC/WFF 尺度を用いて検討する。

分析対象者は研究成果(1)と同じである。解析方法は、個人背景要因（年齢、婚姻状況、教育年数、就業形態、経済状態満足度）を統制し、家庭関与・仕事関与から精神的健康への影響について、WFC/WFF を媒介変数としたモデルを設定した。第 1 段階に 家庭関与として「家事関与」、「育児関与」、「介護関与」、仕事関与として「仕事満足感」、「仕事へののめり込み」、第 2 段階に葛藤と促進のそれぞれ 2 側面により仮定される潜在変数として WFC/WFF、第 3 段階に「生活満足度」と「抑うつ」により仮定される潜在変数として精神的健康を設定した。中高年者の WFC/WFF には性差が示されていることから、上記のモデルに関しても男女別に共分散構造分析の多母集団同時分析を実施した。

多母集団同時分析の結果（図 5）、適合度指標（GFI=.949、RMSEA=.061）は概ね満足すべき値であることが確認された。パラメーター間の性差は、仕事満足感から精神的健康へのパス（男＞女）、WFC から家庭→仕事葛藤へのパス（女＞男）がいずれも 5%水準で有意であった。また、第 1 段階の変数から精神的健康への総合効果では仕事満足感が最も大きく、この直接効果（男=.40、 女=.14）と間接効果（WFC/WFF を媒介）（男=.11、 女=.13）を比較すると、女性ではほぼ同じ影響力が示された。

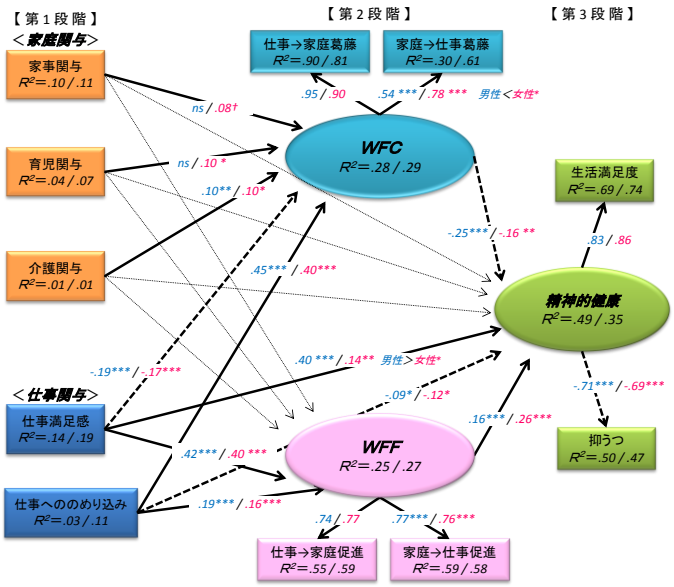

図5 中高年者の仕事と家庭関与･WFC/WFF･精神的健康の関係

注 1）矢印上の数字は標準化推定値を示す。数字は左側が男性，右側が女性の順である。
注 2）矢印は影響の方向を示し，太い実線矢印は正の影響，太い点線矢印は負の影響を示す。男女ともに有意な影響が示さなかったパスは細い点線矢印で示した。
注 3） † p<.10， * p<.05， ** p<.01， *** p<.001

中高年者の家事（女性のみ）、育児（女性のみ）、介護は WFC を高めること、仕事満足感は WFC を低減し WFF を高め、仕事へののめり込みは WFC および WFF を高めること、そして、精神的健康を WFC は低減し、WFF は増進するという影響が認められた。性別による様相の違いは、家庭関与の一部は女性のみにおいて WFC を規定していること、仕事満足感が精神的健康を高める影響は女性より男性の方が大きいことが確認されたが、その他の影響は概ね男女ともに共通であることが確認された。

また、仕事満足感の精神的健康への影響は大きく、特に女性の場合、直接の効果だけでなく、WFC/WFF を介した影響力も無視できない大きさであることから、働く中高年者の精神的健康のためには個人の WFC/WFF を考慮する必要性が示唆された。

(3)中高年者のワーク・ファミリー・バランスと心理的 well-being の関連

有職者にとってワーク・ファミリー・バランスの実現は重要な課題である。仕事と家庭の両立を目指す際には、様々な困難に直面する可能性があり、それを克服して適応できるかどうかは、心理的発達と関連すると考えられる。よって、WFC/WFF と心理的発達の指標である心理的 well-being（西田、2000）との関連が予測される。さらに、中年と高年では仕事や家庭における役割が変化するため、WFC/WFF と心理的 well-being の関係が年代によって異なる可能性がある。そこで、WFC/WFF と心理的 well-being の関連を年代別（中年・高年）に明らかにする。

分析対象者は、第 7 次調査(2010.7－2012.7)に参加した 2,330 名のうち、変数に欠損値のない有職者 1,340 名（中年群：男 522 名、女 408 名、40-59 歳、 平均 49.49±5.79 歳、高年群：男 264 名、女 146 名、 60-85 歳、 平均 66.65±5.94 歳）。

心理的 well-being の 6 下位尺度得点（「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「自己受容」「環境制御力」「積極的な他者関係」（α=.82～.92）を従属変数とし、年代別階層的重回分析を実施した（表 1-1, 1-2)。第 1 段階に個人背景要因、第 2 段階に WFC/WFF の各下位尺度得点を投入したところ、心理的 well-being の各下位尺度得点に有意な説明率の増分が示された。第 1 段階の個人背景要因からは教育年数、収入からの正の影響が多く見出された。これらの影響を統制した上で、心理的 well-being の各下位尺度得点に対して、「仕事→家庭葛藤」からは負、「家庭→仕事葛藤」からは負、「仕事→家庭促進」からは正、「家庭→仕事促進」からは正の影響があることが概ね見出された。年代別では、中年では「家庭→仕事促進」、高年では「家庭→仕事葛藤」「家庭→仕事促進」からの影響が大きいことが示された。

中高年者の心理的 well-being には、WFC からは負、WFF からは正の影響が示され、中高年者の心理的充足感を高めるためにはバランスよく両立生活をすることが重要であると示唆された。また、WFC/WFF から心理的 well-being への影響過程は年代による差異が示された。具体的な様相を詳細に検討するために、β の絶対値が.20 以上に着目したところ、以下の 3 つの注目すべき点が見出された。第 1 は中年・高年ともに「家庭→仕事促進」から心理的 well-being（「自律性」は除く）への正の影響が大きい点であり、家庭役割が仕事役割に対して適用可能な資源をもたらして適応を促進し心理的 well-being を高めることが推測された。第 2 は中年の「自律性」のみ「仕事→家庭葛藤」からの負の影響が大きい点である。仕事から家庭への葛藤が生じると、自己の生活に対する統制感が失われるため「自律性」が低下したと考えられる。第 3 は、高年では「家庭→仕事葛藤」から心理的 well-being へ負の影響が大きい点である。この理由としては、高年における「家庭→仕事葛藤」は、伴侶の喪失・孫の世話・介護などが葛藤の原因である場合、心身への負担も大きいことが推測され、高年の心理的 well-being 低下を招いている可能性があるだろう。

表1-1 心理的well-beingを従属変数とした年代別の階層的重回帰分析の結果

心理的well-being	人格的成長		人生における目的		自律性	
年代	中年	高年	中年	高年	中年	高年
個人背景要因						
性別	.07	-.06	.04	-.10	-.07	-.03
婚姻状況	-.07 *	-.03	.01	.00	-.09 **	.04
雇用形態	-.02	.01	-.04	-.07	-.13 **	-.03
労働時間	.11 *	-.03	.11 *	.05	.18 ***	.05
教育年数	.14 ***	.23 ***	.08 **	.06	.07 *	.06
収入	.04	.04	.08 *	.09	.07 *	.08
WFC/WFF						
仕事→家庭葛藤	-.07	-.01	-.15 ***	-.05	-.20 ***	-.11
家庭→仕事葛藤	-.09 *	-.22 ***	-.07	-.23 ***	-.09 *	-.15 *
仕事→家庭促進	.11 **	.16 **	.12 **	.19 **	.02	.12 *
家庭→仕事促進	.27 ***	.17 **	.28 ***	.21 ***	.07	.03
R^2	.16 ***	.18 ***	.17 ***	.19 ***	.10 ***	.07 ***
ΔR^2	.13 ***	.11 ***	.14 ***	.15 ***	.06 ***	.05 ***

表1-2 続き

心理的well-being	自己受容		環境制御力		積極的な他者関係	
年代	中年	高年	中年	高年	中年	高年
個人背景要因						
性別	.00	.00	.11 *	-.03	.11 *	.03
婚姻状況	-.06	.00	-.04	-.08	-.02	-.04
雇用形態	.03	.01	.01	-.03	.00	-.05
労働時間	.04	.02	.07	.03	.04	.01
教育年数	.11 ***	.06	.11 ***	.02	.04	.02
収入	.11 ***	.10 *	.11 **	.12 *	.02	.13 **
WFC/WFF						
仕事→家庭葛藤	-.15 ***	-.17 *	-.07	-.03	-.14 ***	-.09
家庭→仕事葛藤	-.09 *	-.22 ***	-.13 **	-.27 ***	-.01	-.23 ***
仕事→家庭促進	.06	.13 *	.10 **	.12	.03	.11
家庭→仕事促進	.24 ***	.27 ***	.25 ***	.22 ***	.32 ***	.27 ***
R^2	.15 ***	.21 ***	.15 ***	.17 ***	.13 ***	.18 ***
ΔR^2	.11 ***	.18 ***	.12 ***	.14 ***	.12 ***	.16 ***

注1)表中の値はStep2の標準偏回帰係数(β)である(紙面の都合上, Step1は省略)。

注2) $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$。

なおワーク・ファミリー・ バランスと心理的 well-being の関連については双方向に影響する心理的プロセスも推測される。よって今後はこれらの検討も含めた包括的モデルの解明が期待される。

(4)中高年有職女性の仕事コミットメントと抑うつの関連 - 年齢および就業形態の調整効果 -

中高年女性を対象とした就労に関する意識の検討は十分になされていない。富田他（2011）では、中高年有職女性の精神的健康のポジティブ側面である生活満足度に着目し、仕事コミットメントとの関連を明らかにした。本研究では精神的健康のネガティブ側面に着目し、中高年有職女性の仕事コミットメントが抑うつに与える影響に関して、年齢と就業形態の調整効果を検討した。

分析対象は「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究(NILS-LSA)」の第 5 次調査（2006.7-2008.7）に参加した有職女性 553 名（パートタイム 369 名、フルタイム 184 名)を分析対象とした(40-86 歳、平均 53.2±9.7 歳)。

分析は、抑うつを基準変数とした階層的重回帰分析を行った。第 1 段階で年齢、就業形態（パートタイム＝0、フルタイム＝1）の各主効果を検討した(モデル 1)。第 2 段階では、モデル 1 に各仕事コミットメント得点を加え、各主効果を検討した（モデル 2)。第 3 段階では、モデル 2 に年齢もしくは就業形態と各仕事コミットメント得点の 1 次の交互作用項を説明変数として加えたモデルを検討した（モデル 3)。なお、多重共線性の問題を考慮し、年齢、各仕事コミットメント得点をそれぞれ中心化して分析に用いた。また、交互作用の下位検定は、Aiken & West(1991)の Simple Slope Analysis の手法にしたがった。

階層的重回帰分析の結果(表 2)、モデル 1 では就業形態の有意な正の影響が示された（B=.42, p<.001)。モデル 2 では、モデル 1 と比較した決定係数の上昇が有意となり（⊿

表2 抑うつを基準変数とした階層的重回帰分析結果

	モデル1	モデル2	モデル3
年齢	.00	.04	.00
就業形態	.42 ***	.44 ***	.38 ***
仕事満足感		-.21 ***	-.16 ***
のめり込み		-.06	-.12 *
仕事満足感×年齢			.09 *
のめり込み×年齢			.09 *
仕事満足感×就業形態			-.09 *
のめり込み×就業形態			.10 †
R^2	.177 ***	.225 ***	.252 ***
ΔR^2		.048 ***	.027 ***

注1) †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001,
注2) 表中の数字は標準偏回帰係数を記した。

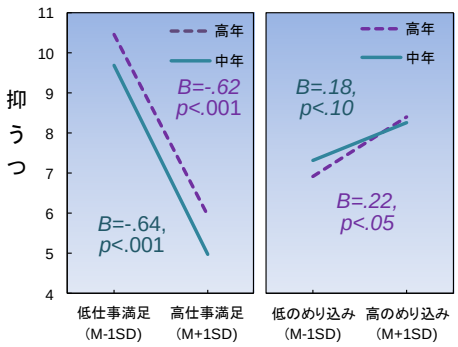

図 6.仕事満足感が及ぼす影響と年齢の調整効果　図 7.仕事へののめり込みが及ぼす影響と年齢の調整効果

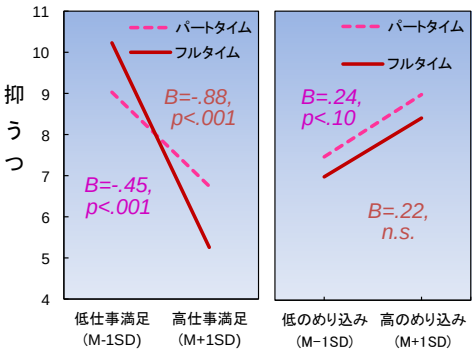

図 8.仕事満足感が及ぼす影響と就業形態の調整効果　図 9.仕事へののめり込みが及ぼす影響と就業形態の調整効果

＊M：平均値を示す。

R^2=.048, p<.001)、仕事満足感から有意な負の影響が示された（B=-.21, p<.001)。モデル 3 では、モデル 2 と比較した決定係数の上昇が有意となり、仕事コミットメントと年齢もしくは就業形態の交互作用は有意もしくは有意傾向になった。よって、交互作用を詳細に検討した。仕事満足感×年齢の効果（図 6）は、高年条件下（B=-.62, p<.001）および中年条件下（B=-.64, p<.001）のいずれも有意となった。仕事へののめり込み×年齢の効果（図 7）は、高年条件下（B=.22, p<.05）および中年条件下（B=.18, p<.10）のいずれも有意もしくは有意傾向となった。仕事満足感×就業形態の効果（図 8）は、パートタイム条件下（B=-.45, p<.001）およびフルタイム条件下（B=-.88, p<.001）のいずれも有意であった。仕事へののめり込み×就業形態の効果（図 9）は、パートタイム条件下（B=.24, p<.10）では有意傾向であったが、フルタイム条件下（B=.22, n.s.）意ではなかった。

交互作用に着目すると、仕事満足感については、中年女性の方が高年女性よりも、また、フルタイムの方がパートタイムよりも、仕事満足感が高いと抑うつが低減するという関連が顕著であることが示された。また、仕事へののめり込みについては、高年女性が中年女性よりも、また、パートタイムの方がフルタイムよりも、仕事へののめり込みが高いと

抑うつが増大するという関連が顕著であることが明らかとなった。精神的健康のポジティブ側面に着目した、仕事コミットメントと生活満足度との関連（富田他、2011）と同様、ネガティブ側面の抑うつの観点からも、中高年女性の仕事コミットメントと抑うつの関連に、年齢と就業形態による違いがあることが示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔学会発表〕（計３件）
①富田真紀子・西田裕紀子・丹下智香子・坪井さとみ・安藤富士子・下方浩史．中高年者のワーク・ファミリー・バランス-家庭関与、仕事関与、精神的健康との関連に注目して-、日本発達心理学会第 24 回大会、2013 年 3 月 15 日、東京.
②富田真紀子・西田裕紀子・丹下智香子・安藤富士子・下方浩史．中高年者のワーク・ファミリー・コンフリクトとファシリテーション、 日本心理学会第 76 回大会、2012 年 9 月 13 日、川崎.
③富田真紀子・西田裕紀子・丹下智香子・森山雅子・坪井さとみ・安藤富士子・下方浩史．中高年有職女性の仕事コミットメントと抑うつの関連 - 年齢および就業形態の調整効果 - 、日本発達心理学会第 23 回大会、 2012 年 3 月 9 日、名古屋.
〔その他〕
ホームページ等
www.ncgg.go.jp/department/ep/index-j.html

６．研究組織
(1)研究代表者
富田　真紀子（TOMIDA MAKIKO）
国立長寿医療研究センター・予防開発部・研究員
研究者番号：40587565

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし